

学校レクリエーションの視標

稲垣保彦(富山大学)

理論と実践, 自然と技術, 時間, ことわざ

1. 余暇社会に向けて

1970年代のはじめ, わが国も「余暇時代に向って離陸した」といわれたのであるが, 石油ショック以後の低成長時代を迎えて, 余暇問題は, やや後退したとはいうものの, 物質的豊かさをねがう時代はすぎて, それにかわるものが求められ, また, 生活の質の追求される時代になってきつつある。余暇をどう過すかは, すぐれて個人の興味関心, 趣味嗜好に依存する面が大きいと同時に, それ自体は, 一人一人の生活の質を改善していくことの大きなかわりをもっている。また, 国民の余暇の過し方自体は, 国民の文化の反映であるとともに, 文化を創造していく役割を担っており, 低成長時代であればこそ, むしろ, 物から離れた精神的側面の向上が強められる時代になってきている。マス・レジャー時代, あるいは, 工業化社会の後にくるものが何なのかについては, はっきりした解答が得られておらないにせよ, 生活の質に注目し, 改善向上にかかわって, 余暇のあり方, 過し方について, 新たな展望が求められている。

2. 科学技術と人間

勿論科学が進歩すれば, やがてある技術の応用がどういふ結果をもたらすかは, すべて予め知っておくことができると考えることも, できるかもしれない。例えばある薬がその副作用まで含めて人間の身体や精神にどういふ効果をもたらすか, あるいは, ある都市計画や工場誘致が地域社会をどのように変貌させ, そこに住んでいる人々の生活にどのような影響を及ぼすか, 人間の心身両面にわたって, これらのこと一切を科学は, いずれ説明してくれる。だから科学によって我々は, いずれ社会全体を, しかも人間一人一人の内面深くまで制御することができる。……こう我々は考えることができるかもしれない。だが我々は本当に科学にこのような全幅の信頼を置いていいのだろうか。結論を先に言おう。科学技術によって人間の生活全般を制御できるという, この余りにも近代的(ノ)な見方は, 人間の生命に対するある種の根本的な誤解に基づいている。科学技術の美しい成果に目を奪われて, 我々現代人は余りにも科学や技術というもの, 本性について思索することが少なすぎる。その結果, 我々は知らず知らずのうちに, 科学はこの世界に起っている一切のことにいずれ最終的な結着をつけることができるというような, おめでたくも不遜な考え方に染まっているのではなからうか。本当に我々が考えなければならないのは, 人間が生きているということは, 一体どういふことなのか, ということだ。

3. 自己活性化 提言(1)

「活力」, このことばに魅力を感じて, 日は長い。「生活体力」ときめこんだ時期もあった。しかし, 今は, 「生活」とは何なんだと迷い, 「生命の活動」, 「人間, 生きる」ということは, どういうことなんだ」と, つい先日も紅葉のすばらしい秋の立山—それは静かだったです—を, 学生とことば少なげに歩きながら考え続けました。室堂乗越から奥大日岳までのアプローチは長い。一本たて, 流れる汗を拭いた時, 私は, 大地から, にじみ出るように, 想い出したことばがあります。「健康は人生にとって, 唯一のものではない, しかし, 人間健康でないならば, 何もできない」—西ドイツ, トリム運動のキャンペーン—と。前期試験あけの休暇, われわれの自由時間といってさしつかえない。二泊三日のこんどの山行はすばらしかった。さて, 「余暇」, 「ひま」, このことばから私は, いかにもしょうがないという消極的な印象しか残らない。「自由時間」, 私の時間なのだ。日頃, やりたくて出来なかったことを, この時間にやろうという, 自主的・積極的な態度で, この時間を考えたとき, はじめて生きてくるのだと思うのです。「活力の場」, それが「自由時間」でなからうか。多様性の選択は, 主体的でなければならず, 情報化社会に生きる人間は, 自分の考えを大切に, 問題を発掘し創造的に深めていく努力が人間の生きがいを感じさせるのではなからうか。しのびよる危機の一つに, 「健康」がある。健康は栄養, 睡眠, 運動と誰もが理解しているが, 機械文明の便利さになれ, 汗かく喜びを, 一汗かいた後のサッパリした充実感を忘れてはいないだろうか。そして何事も人生, 持続性が最も肝要であろう。汗かく人間の素朴な ぎが習慣となった時こそ, 行動的な人間が期待でき, 「理論」と「実際」の両輪をあわせもった自律人間につながるのではないだろうか。

4. 時間への問いかけ 提言(2)

「余暇」, 「自由時間」, 何れも時間の範囲である。ミヒャエル・エンデの場合によれば, 「モモ」—時間どろぼうと, ぬすまれた時間を人間にとりかえてくれた女の子のふしぎな物語—, 人間が備蓄した時間を, カスミとたべて活動する時間をどろぼう, 時間に追われて, ギスギス, イライラする村人の人間関係を心配するモモ少女。時間の国の主は, モモに語りかける。「モモちゃん, 時間とは, 時間どろぼうがどのように備蓄するものではない。時間とは, 人間, 光を見るために目があり, 音を聞くために耳があるのと同じように, 心に思ったことを, 不完全でもよい, 形に現わすべく努力していると, いやでも時間がかかる。時間とは, そのように重層的なものなんだ」と。時間とは

感情の一種だとしか考えられないと、迷った岡澤数学者のことばが想い出される。自分で考える。これほど主体的なことが、どこにあるか。人の道は心にあり、人の心は行いにある。自分の心に思ったことを、こつこつ積み重ね、充実感を体験することがレクリエーションの原点でなかろうか。

5. 活動性 提言(3)

一空にまた、陽が昇る時、若者はまた、歩き始める。フォーク・ソング「若者たち」は好きな歌です。三題目の歌詞が標題です。夏山とはいえ、朝の4時は冷え込みはきびしい。つめたい水での炊事、メンバーはあまりしゃべらない。黙々と分担作業に精出している。食器の後仕末、テントの撤収、パンパン音させながらパッキングを終った時、リーダーの「さあ、体操や」の声がかかる。朝の運動は五体の節々を、徐々に柔軟にしてくれる。気持がよい。山の端に朝日がさし始める時が出発である。私は、キャンプ・ファイヤーで、あるいは学生とのコンパの時など、「若者たち」を唱うといつもききまわって、山での出発風景を想い出します。その他、何かを、やり始める時にも、よく心の中で唱います。それが仕事であろうと、好きなことであれ、嫌なことであれ、よしと、張気ってやり始める時が、「若者たち」の出番となるのです。

ある時、こんな事があって、なるほどと意を強くしたことがあります。その日、中庭のぬれえんを作ろうと思いたち、先づ竹の準備をと、家内のさに行った時のことです。祖父は気持よく「お、いくらでも持っていけやあー、気がねはいらんよ」、「うまく出来るか、どうか、心配ですが」と一寸遠慮気味に話した時、「いや、動き始めりや、仕事は半分道や」と。夢中で3時間ばかり、あれやこれやと、八方に想いをめぐらしながら工夫して、なんとか、ぬれえんらしきものが出来上った。美しい緑の竹えんに腰をおろし、うまい煙火を喫いながら、つくづく老人はうまくいうもんだなあーと。さっきの「動き始めれば、半分道や」のことばに、感心させられたものです。「動き始める」このことは「歩き始める」にも通ずる。山での縦走は歩き始めなかつたら、目標の山には達せられない。仕事も、何もかもが、動き始めなかつたら万事休すである。

「歩く」といったら、今一つ、大切にしている名言があります。大哲ルソーの告白「ひとり徒歩で旅した時ほど、ゆたかに考え、ゆたかに存在し、ゆたかに生き、あえていうならば、ゆたかに私自身であったことはない。徒歩は私の思想を活気づけ、生き生きさせる何ものかをもっている。私の精神を動かすためには、私の肉体が動いていなければならぬのだ」と。勿論、歩くことは立派な運動である。

しかし、それ以上に、動的哲学ともいえる「思考の場」であろう。人間の内的、精神的な、活発なえい智を醸成する、もっとも人間らしい行動でなかろうか。

6. 余暇生活能力 提言(4)

「ひまで、ひまで、しょうがない」と、手持ち不沙汰に、グロツとしている人は、労働時間45時間の中間発表が出された今日、ますます多くなることはみえすいている。余暇が待遠しいほどに、余暇が充実されている人の秘訣は一体何なんだろうか。それは体験的に、時間とは、自己を生きさせるものは何か、その為には、先づ動き始めねばならないことを知っている人である。学校生活は、保育所、幼稚園から、小、中、高、大学にいたるまで、従来より以上に、野外活動を通して、体験や、実践を直接経験し、遊び性と学び性にきめ細かい計画が大切であろう。人は知っている限りにおいて行うものであり、知っていないことは行うことが出来ない、知識が大切である。余暇時間の知性化といってもよいだろう。

7. 語録アブローチ

- 生きることは、呼吸することではない、活動することである。
- 我々は、大自然の永遠の調和の中に、再び自己を発見することが出来る。
- 人は労作する動物である。
- 健康な身体は、身体の健全さの故に、精神を改善することは出来ないが、健全なる精神は、精神の健全さの故に、身体を改善する。
- 知が力である、継続が力である。
- 退屈を克服する、からだの動き。
- 君にとって、もっともやさしいところから始めるがよいともかく始めることだ。
- 何事も延期するな、汝の一生は不断の実行にある。
- 働らく場所のないところに、生甲斐はない。
- 自らの力を、出しきった充実感。
- 規律ある余暇。
- スポーツ的自律人間。
- 克服スポーツ。 • 健康は自己責任。
- 既成の種目にとらわれず、日常生活の運動不足を補い、健康を保っていくための、新しいスポーツは、健康と楽しさを求めて、からだを動かすことである。
- 「萌」、燃えることではなく、萌えるのは大地から萌える陽炎(かげろう)の如き、波うつ意欲である。
- 「律」、自然のリズムを大切に、自分にきびしく、生活にとりくむことである。